

# パーソナリティのそもそも論をしよう

渡邊 芳之, 小塩 真司, 北村 英哉, 詫摩 武俊

2016年4月28日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

パーソナリティのそもそも論をしよう。パーソナリティ心理学の歴史的・社会的文脈と最近の動きとを結びつけることで何が見えてくるのか。日本パーソナリティ心理学会との共同企画として、理事長の渡邊芳之教授と常任理事の小塩真司教授が対談を行い、参加された北村英哉教授、詫摩武俊名誉教授らと交えて議論を深めました。

## Section 1

### いま、そもそも論をする意味

**渡邊芳之 (以下, 渡邊)**: 帯広畜産大学の渡邊です。現在、日本パーソナリティ心理学会<sup>(1)</sup>の理事長をしています。今年まで、学会誌『パーソナリティ研究』の編集委員長を長く務めてきました。これからこの学会をどうしていくかということの1つとして、パーソナリティや性格についてのそもそも論をする場所を設けたいと思ひまして、このような研究会を企画しました。

**小塩真司 (以下, 小塩)**: 早稲田大学の小塩です。いま、日本パーソナリティ心理学会の国際交流委員長をしています。2016年の日本パーソナリティ心理学会でも海外からゲストを呼んで、国際交流をしていきたいと思っています。最近若い世代は海外の学会に行き発表もしていると思いますが、個々には交流はありますが、言葉の問題もあって、隔絶したところもあるので、そういった実感をお話できればと思っています。

**北村英哉 (以下, 北村)**: 関西大学の北村です。来年度、関西大学で開催する日本パーソナリティ心理学会大会<sup>(2)</sup>の大会委員長をしております、何か企画のヒントを得られればと思っています。

**詫摩武俊 (以下, 詫摩)**: 詫摩と申します。日本パーソナリティ心理学会は、以前は日本性格心理学会と言いました。いまから30年ほど前に日本大学の政大先生<sup>(3)</sup>と私と、あと渡邊君と佐藤達哉君<sup>(4)</sup>が私のおりました東京都立大学の大学院の学生でして、大村先生を含めて4人でいろいろと話をしました。ちょうどいろいろな学会が作られる頃だったので、性格心理学会を作ろうという話になり、平成になってからできました。ですので、学会ができてから平成の年数と同じくらいになります。私が初代の理事長を務めました。大学を辞めた後はしばらく非常勤の講義などをしておりましたが、いまはどこにも所属せず、まったく何もしていません。今日は若い方が集まって、性格やパーソナリティの遺伝と環境の問題についてお話があるということのを伺ったのでまいりました。

**渡邊**: 今日は他に日本パーソナリティ心理学会の若い方が何人か来てくださって、ありがたいです。また、私の恩師である詫摩先生がわざわざ来てくださいましたが、このことは今日われわれがこの研究会をやろうと思ったことと非常に関係があります。

私が東洋大学の社会学部で社会心理学の基礎教育を受けて、東京都立大学の大学院に進み、社会心理学の加藤義明先生<sup>(5)</sup>の研究室に入りました。そのとき東京都立大学の研究室の主任教授でいらしたのが詫摩先生でした。詫摩先生は心理学講座で人格心理学を担当されていました。

1年生の最初のときに詫摩先生の人格心理学のゼミをとって、そのときのゼミが、世界にはいろいろなパーソナリティの理論があるので、院生1人ひとりがいろいろなパーソナリティ理論について勉強してきて発表を下さい、というものでした。私は社会学部卒業でしたから、心理学の一般的な概論を習いませんでしたので、パーソナリティの心理学のことは受験勉強の際に概論書で勉強したくらいでした。いろいろなパー